



## 定時制と通信制の生徒一人ひとりの対応の難しさ

宮崎県高等学校教職員組合 土持 奈都美

私が初めて定時制高校に勤務したのは、今から20年前です。転勤が決まって初めて、定時制や通信制の高校があることを知りました。その頃の生徒たちの様子は、昼間にアルバイトや正規雇用など様々な形態で働いている方たちが自宅で着替えもせず、作業着でギリギリやってきて、パンと牛乳だけの給食を食べて、夜の4時間の授業を受けていました。いろいろな年齢層の方がいて、中には20代、60代の方が学んでおり、とても和やかな雰囲気がありました。

その後、勤労青年のための教育機関としての役割だけでなく、多様な学習ニーズへの受皿として、様々な困難を抱えた生徒たちも入学してくることとなりました。「とにかく高校卒という資格がほしい」「親が高校だけは卒業しろと言う」というような理由で入学してくる生徒が増えてきました。担任として、警察の方と会ったり、お店に生徒と謝罪に行ったりしたこともありました。

そうして現在のようにいじめや様々な理由で小学校や中学校に行けず、不登校になった生徒たちが多く在籍する学校になってきています。私の勤務する定時制高校ではほとんどの生徒が不登校の経験をもっています。そのため、言葉でのトラブルが多く、人とどう距離をとればいいのかということを難しく感じているようでした。さらに SNS におけるいじ

めや陰口など陰湿化もしており、私たち教員に相談があったときには、当事者同士だけでなく、周りの友達や両方の親などが関わっており、複雑にこじれて、なかなか修復の難しい状態になっています。また、精神疾患や ADHD などと診断された生徒たち、療育手帳や精神障害者手帳などを持った生徒たちも入学してきて、私たち教員には多くのスキルが求められています。教育相談部として、担任として日々悩みながら生徒たちと向き合っています。定時制、通信制は今後どのような生徒たちが入学し、また私たちがどのようなスキルが必要になってくるのかわかりません。いろいろな研修に参加し、学び続ける教師、パソコンの画面を見ながら話すのではなく、生徒に対しても、同僚に対しても顔と顔を向けて話す教師でありたいと思います。

